うたそら

第10号

2022 9 September

参加者一覧 …… 02

連作欄 8首の連作 自由詠 …… 04

テーマ詠欄「涼」…… 19

一首評「そらよみ」…… 22

短歌リレーコラム「望遠鏡」…… 24

リレーエッセイ「いちごいちえ」…… 26

次回予告・編集後記 …… 27

うたそら

ご参加いただいたみなさん（五十音順）

第10号

青野佑季	@book_aoimusyoku
あき子	@ponko_san
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
阿部蓮南	@renalt815
雨虎俊寛	@amefurashi3107
有村桔梗	@chattenoire_k
歩歩	@subjperf
池田竜男	@tankadragonman
石川順一	@Hitler57
一色凛夏	@88rinrin23
インアン	@InAn_erotica
宇祖田都子	@Shinnsyutu2020
hs	@hswelt
大坪命樹	@OotsuboMeiju
音無早矢	@otonashi_haya
音平まど	@nandemonaihi16
歌島孟	@Sinn1990
涸れ井戸	@kareido1111
河岸景都	@kate_kawagishi
北谷雪	@kitaya_misomiso
砧	
君村類	@kmmr_r09
くろだたけし	@tkuro2016
毛糸	@sakana_cav
咲兵衛	@izumitakeishi
佐藤水魚	@satohio_tanka
汐射ハルカ	@haru_c17h17cl2n
鹿ヶ谷街庵	@ikasamabakuchi
嶋田さくらぃ	@sakrako0304
西鎮	@xi_zhen_ivUT
雀來豆	@jacksbeans2
白石夜花	@yohana_no_sekai
神保一二三	@jimbo_hifumi
寿司村マイク	@xHksbNR4wv1wj8M
たえなかすず	@suzusuzu2009
多香子	

計70名

たくさんのご参加ありがとうございます！

高橋良	@takahashi_ry5
千原こはぎ	@kohagi_tw
月硝子	@gesshodo
ともえ夕夏	@croissant_hey_z
中村成志	@nakam8
成瀬悠	@naruse000yuu
奈瑠太	@nalda_aa
西淳子	@Jacky244Ray
西村曜	@nsmrakira
ネコノカナエ	@nekonokanae_uta
薄荷。	@aie0himeco
廣珍堂	@Hirochin_dos
福山桃歌	@momoka_fukuyama
細川エリカ	@luvluvkasen
螢子	@hotaruko128
茉枝くまこ	@__skkm
真岡まな	@mao_or_mana
まさけ	@mskpompomfuwa23
御糸さち	@MEATsachi
深影コトハ	@cotoha_mikage
衣未	@mimi_4567
水せ	@m_iya_o
虫武一俊	@mushitake
睦月　雪花	@mu_tsu_ki_s
六厩めれう	@mereumumai
村田一広	@mucci2022
森内詩紋	@NJq4oEvg5gIcRpu
杜崎ひうく	@kousei_tsurun
杜野詩季	@4kitanka55
矢野目知桂	
ゆや　ゆぎ	
ゆりぃ	@b7282e_akaneiro
龍翔	@oppizuntsuan
れこあむ	@re14m_bot

潮騒のエンドロール

青野佑季

手を繋ぐには意味のなさない鱗　剥がせども剥がせども光って
落ちないなんて嘘もうどうでもよく涙綺麗なラメのキラキラ
傷む胸とは此処でしょうか　滲んだ眦から生まれる遠雷
どの夢も夢じゃないのは波が冷たく君のことだけ触れない
何度でも目を覚ましたい夢だった抱きしめて安心したかった
星になっても降らないでどうせなら幽霊とことん怖がらせて
誰にも優しくない海がいて、まだ人間のまま、泣いていました
私にだけ聞こえる声がありまた会える気がして夏を捲った

伝説を信じる

あき子

痛いとき貼る絆創膏　痛いときだけ便利ってありがたがって
痛いのは失くしたからじゃなくてもうそれを大事にできないこころ
多面体であるこころのできるだけあたたかそうな部分にふれた
ふれたとき、ふれられたとき　かたちにはなれないけれど一瞬の星
消えそうな星のゆくえを追いかけて蒼く湿った森に迷い込む
森、それは樹々の連なり　ひとりきり生息してるつもりの生き物
生息の仕方はそれぞれ　学生の頃ならおなじグループじゃない
「おなじこと」を必ずしも前向きに捉えきれずに乗る山手線

ウッドブロック

阿部蓮南

エアコンは約束どおり起きたからアラーム音の名はモーニング
コンビニの飲むヨーグルトひとパック律儀にシェイクしている両手
独唱で始まる野球大会のバットはドレミパイプのように
新品の硬いジーンズ叩いたら君が来ていることに気づいた
今回の二人がかりは拾うこと止まったチャックが急に開いて
イヤリングをぱちんと閉じてはじめてのあだ名で呼ばれる感触だった
ホイップかカスタードかを選ぶとき頭のなかはウッドブロック
練乳のスノーアイスを飲みきって人混みに戻る前の声出し

天神祭

雨虎俊寛

緑青の城から白い曳き波を生んで水上バス遠ざかる
「チェサジャー」と境内に声あげながら催太鼓は大門くぐる
陸渡御に花緑青の薄被衣（うすかつぎ）まとう采女が母に手を振る
真っ白な股引き姿の若衆に菖蒲の浴衣ラムネを渡す
りんご飴ぼくにあずけて金魚追う浴衣姿のおくれ毛見てる
「冷（ひや）こいなぁ」人指し指で支えてる金魚袋を額に当てて
大川は奉納花火に照らされて犇めく鮒のように船渡御
りんご飴たったひとくちかじったら「もういらんわ」と空に投げたり

逃げ足

有村桔梗

長芋をしづかにおろすすこしづつ失はれゆくものたちのため
大人とは補助輪をはづされたまま走りつづけるいきものでせう
とは言へど夏のひかりに灼かれれば言葉失ふわたくしだから
革命を呼びかけてくる　カラスウリはましろく夜の狭庭にひらき
うすやみに待宵草が揺れてゐる　夏の涯（はたて）を教へるやうに
終ひまで花火見届けお揃ひの゛がほ並べてゆく帰りみち
ゆくなつのひかりかなしゑ　硝子器のみづにさうめんひとすぢ揺らぐ
逃げ足のはやい夏だつた　ほつこりを胸に抱へて夜道をくだる

夢八夜

池田竜男

どの犬も同じ光源持つことがうらやましいと揺れる人影
耳の猿が先に名前を聞くという護岸工事を繰り返してる
上あごの独立の日が来たようにわにへびとかげほほえみだして
うとうと、と幼なじみの乗る馬のうしろについて海へ入りゆく
肺魚の尾ゆらゆらゆれるすぐそばの水でありたい斥力として
陰茎包皮子にひっぱられ対岸に魚がはねるように見ている
柵のなかオカピがいないほんとうはオカピはいない気にもなりつつ
柔らかく握ることさえ叶わない水の子として握る菱の実

「蟻」

石川順一

脱皮する芋虫葉に有る黒い服初めて見たぞ脱ぎ捨てた服
掃除屋の存在それは屠殺者で集団力の蟻が行く行く
幹上る蟻は激減アリキラー根の方に居る行列は止まず
巣をやられ蟻は新たな巣を作るカイガラムシが飛び回って居る
食事前富士の名水飲んで見る蟻の気持ちは分からないけれど
巣をやられ蟻は防備の土を置く物干しパイプや幹や巣などに
「むぎばたけ」アトリーの絵本矢川訳蟻は果実の木に頼り切り
「順延」と「忘れていいのよ」が読めなくてチャンドラボースと蟻を比較す

粉々に散る

一色凛夏

好きだった気がして買った真緑のメロンソーダを半分残す
どうぶつの森で時間を有意義につぶす　穴をどんどん掘ってく
前向きな自殺行為としていつも二本砂糖を入れるコーヒー
「で？」がもう全然納得していない声だ　二の句が粉々に散る
その段差、気をつけてって聞く前に躓いているような失恋
もう誰のものでもないビニール傘の屍拾う豪雨後の朝
remember me　Tシャツに殴り書きされたみたいな文字踊ってて
幸せは返ってこんし増えんのにハッピーターンの粉はおいしい

水溶液

インアン

気づいてる？宇宙の端が膨らんで 私たち日々遠ざかってる
ギラギラと星を売ってるため息も吐息も全部通貨に換えて
引き金を引いてる自覚のない奴らばかりの星の成層圏へ
その星はただ湖を浴びたくて脇目もふらず青に染まった
その時はどうか滅亡したことに誰も気づいていませんように
遺言を考えている頃だろう　今夜光が届いた星も
ネクローシスもアポトーシスも溶ける何かを生かすための死
さらさらと流れてはまた注ぐ雨の土産話を海は待ってる

屋上獏部Ｘ

宇祖田都子

夏休みピエロが怖い登校日部長がくれた異形のピアス
後肢で入道雲を蹴り上げよクレーコートに響くコーラス
三ツ折のスカート裏に少しだけ菫色したミクロコスモス
肌色のクレヨンだけでできている獏の神社のおみくじは「喉」
真っ黒な虹の真下で噛み締める薬草園に光の長さ
渦を巻く銀河宇宙が落ちてきた弁当箱の蓋ですくった
鰯雲みたいに床に敷き詰めた炸裂しないモザイクタイル
チョコレート通り過ぎてくコオロギの髭と肢とを入れ替えながら

和気見ざる日石寺

大坪命樹

この猛暑コロナが焔移れるや　出で難ければせめて水汲み
湧き水の奥を進めば日石寺　打つ滝ありて涼しからむや
行しをる女二人ぞためらひがち　髪のみだれを憚りをるか
かの二人したたか打たれで涼しからず　代はりに滝に打たるべからば
猛暑にて滝行すでに遊行なれどきみ日焼け止め落つるを案ず
来しかひに護摩木に願ひ記すなり　遊行すべからざりしかはりに
かへり路外れに三重（みへ）の塔ありき　硬材入り組む抽象オブジェぞ
三重の塔に続く山路歩き行く　夫婦岩なる両の巌も

あれは、夏

音無早矢

夏の終わり　果てしない空だったのね、折り込みチラシはややあたたかく
記憶として夏は鮮やか　窓際を走る空気がまぶしかったね
じゃんけんのかたちをしてる雲がいてすごく負けたくない、本当に
運命としての夕暮れだったのね、わたしも空に浮かんでいたかった
流転する　これからします　おそらくは、生まれた時の姿のままで
浜辺にはあなたの手形　美しく波にのまれて消えていくこと
水族館のえびの脱皮を思い出す　だいじょうぶ、苦しくないよ
隣町まで続く空　おやくそく、しらないひとにはついていかない

約束

歌島孟

過去なにがあったかなんて語らない、期日を越えた約束がある
目標をなくしたままに空をまだ見つめ続ける野砲に花を
壊れてる世界に満ちている何か計器の針は振り切れている
微笑みを常に絶やさず野ざらしに眼尻錆びてゆくマスコット
知識へと手向けた花の本たちが積み重なって開かれている
九相図の何番目かの芳香で錆びついているネジを拾った
方舟はもう出たろうか、星空のスープに沈む街がきれいだ
残されたものを数える手の平は広げたままで、まだ握れない

二世帯暮らし

涸れ井戸

午前四時ニンニクの皮剥いでいる指の腹にもある摩擦力
エチゾラム他二種の眠剤飲み寝てる妹を起こさぬよう、そっと
二世帯で暮らす孤独というものも体験してから死ぬ運命
冷蔵庫そっと開け閉めするたびに理不尽という概念が来る
妹と姪のペットが懐かない真夜に帰宅する毎吠えられ
いちじくのパックを別で買ってきて妹と姪に全部わたす
眠剤を倍にしたけど寝れないと翌朝言われ苦い顔する
新しいヤサを探すと宣告し妹が見る引っ越しアプリ

空想と旅

河岸景都

此処じゃない何処かへ行きたい気がするの、空想だけはせめて許して
時間まで私のものでこんなにも自由な旅は少し切ない
染めた爪、銀色ピアス、白いシャツ。特別だけを連れていきたい
知っている天井ばかり見上げてもときめかなくて瞼を閉じる
パスポートなら夢にある本当の私のことは誰も知らない
呼び掛けを全部無視してみたかった空を飛ぶのは簡単じゃない
独りきり変わる景色を見届ける自由の意味を確かめたくて
雑誌には載らない場所にいつの日か心だけでもそっと置きたい

それから

北谷雪

ｉＰｈｏｎｅのりんごに齧りつく度にか細くなっていく自分の可食部
雨音の聞こえるような全集を開いて眠る　遠くまで行く
倫理ってロンリーとかく生きづらい曇天倫敦塔から落下
中毒性知っててあのとき受け取った虞美人草が本当はこわい
変な一人称の猫これは夢なんて優しい私のアテレコ
Ｋ、それは死ぬにはあまりに凡庸で主人公にはなれないやつだよ
さようならドラマチックにこの門を開けるシーンをプロローグにして
カーテンの大きく揺れて図書室は誰かを逃した後らしかった

共犯

君村類

スプーンも鍛えあげれば武器になるおれもおまえも爪は短い
欲しくないふりをするのはもうやめろアイスの蓋をゆっくり剥がす
じゃくじゃくと噛むチョコミント　体温で融けていくものだけがやさしい
エアコンの温度を上げる夕暮れにこんな打ち明け話は似合わない
爽やかで甘いものならチョコミントだけでよかった　そのはずだった
あっけなく紙のカップをへこませて何を守れるだろうこの手は
恋愛がふたりでできてしまうせいでおまえがおれを共犯にする
誰も傷をつけずに生きていくための互いの丸い爪を見ている

名探偵はあわてない

くろだたけし

助手だけを先に現場へ走らせて名探偵の遅い朝食
現場へと向かう途中で助手が買う缶コーヒーとアイドル雑誌
編み物をしていたと言うおばさまの鉤針からの血液反応
誕生日を祝うケーキがあったのに誰の誕生日でもないなんて
令嬢が失神すれば抱きとめる気持ちでいるが元気な令嬢
夏野菜泥棒だった恋人が罪を償うまでは待てない
さっきから猫がしきりに気にしてる僕ではなくて僕の後ろを
本になり売れたらいいなこの事件名探偵が現場に入る

夏休み、島で

毛糸

この海を結晶化してサファイアとエメラルドが生まれるらしいよ
前世では椰子の実でしょうぽっかりと太平洋に浮かぶあなたは
やわらかく霧雨が降る羊歯の森　濡れたからだは森と溶けあう
躊躇いもなく唇を赤く塗る強い女のような花々
七色のシェイブアイスを食べながらねえ見て今日もうみっつめの虹
満天の星は闇夜を駆逐する正しいことは少しこわいよ
真っ青な海より映えるアイスより笑い顔だけ集めたフォルダ
日焼けあとひりつく肩をくっつけて微睡んでいる　休暇は終わり

乾季のヴァラナシ

咲兵衛

ガンガーの川霧浴びて薔薇の芽の深呼吸する新しき朝
ガンガーの左岸はヒマラヤ山脈に向かひて左と現地の友は
砂浜で夜明けの沐浴せんがため小舟の親子は左岸に渡る
朝日を生む悠久の河に身を沈め髪まで浸かる洗礼のごと
外岸の清しき左岸のピクニック沐浴しつつ子ら泳ぐなり
杜を越え砂丘を越えてガンガーまで仔馬をひいて来たる商人
ガートより望む彼岸に母子遊ぶ仔犬とじやれて仔馬に乗つて
雨季は呑まれ不浄とされる左岸なれど今ひとときの光溢れる

グライディング

佐藤氷魚

アルペジオ奏でるように金色のツバメが統べるはじまりの空
おたがいの扉をひらく認証のために運命線を合わせた
燃えさかる太陽系の中にいて熟した順に桃を並べる
見上げればΣ（シグマ）の滑翔　愛しさの総量なんて分かるわけない
完熟のしずく滴るくちびるは輝きを増す　嘘が上手いね
夢に見るきみは記憶と償いの複合体としてわれを抱く
こと切れるときは伝えて秋色の風におののく楓にのせて
明け方の航空灯は泣いておりまた来る鳥の低さを思う

曙光

汐射ハルカ

ラーメン屋閉店時間が早すぎてぼくらはここで難民となる
またひとつ始まり終わる足掻いてるふわりと湯気で包んであげる
雨の日も手をのばしてる空に向け好きの気持ちが渡るかけはし
時折に触れる指先搦む髪ここにも触れてほしいと思う
ももいろの刃もてきみ抉り出せわたしが夢の底に在るとき
まなじりに皺が三本顕れる朝の笑顔のきみがいとしい
温度差はもう感じない離さないハブステップとシャツ泳ぐ風
ひとりでは届かなかった場所があり茜さす町紫の空

本上まなみに出会えなかった

鹿ヶ谷街庵

東京の大学にいくぼくに良いメリケンサックをくれたおとうと
雨ふりの動物園の猿山でぼっちの猿がぼくを見ている
さっきまでちんこいじっていたぼくが論語の訳の採点をする
りゅうちぇるの亀頭が光る午前二時　俺はバイクでＴＥＮＧＡを買いに
恋人とずっといっしょにいたくっておこなうピノをわけあう儀式
逃げだした彼女の猫を探すため愛欲なしに夜道を歩く
かなしみを韓国ドラマでしぼりだしかなしみなんてない顔をして
どのように生きればたどりつけたのか本上まなみがいる生活に

ダリアとゼリー

嶋田さくらこ

鉄塔を光らせている文明の夜にあなたが熾す火がある
遠くまで聞こえるように嘴を黄色にしたら悲しくなった
雨が降るまえにあなたが来るまえに畑の白いダリアになろう
食べられる草と食べられない草があって生きるってむずかしい
サイダーを飲んで透けゆく体かな　水族館へクラゲ見にゆく
父の観るＡｍａｚｏｎプライムもしかしてロッキーとランボーまちがえている
液体は二時間を眠りゼリーへと変わる冷蔵庫のくらがりに
楽しいと思えなくても、こんなにも蛍は光るものだった、夏

鬼灯

西鎮

終へてから手はつながずに郭公の声だけ響く河べりをゆく
八月の女はいつか遠ざけた林檎のやうに性欲を言ふ
肋骨のうちに静かな鳥のゐてきみにあふたび小さく羽ばたく
ピカチュウと何処か似てゐる女とはあの海のあと別れたらしい
ゆきちがふ猫のすべてが朝帰りみたいにみえてゐる夜勤あけ
魔女たちが昔ディスコでつかまへた鳥のはなしをしてゐるガスト
そのジョニー・デップを犬にしたやうな老犬ならば昨日来てゐた
まだ赤くなるはづの鬼灯を摘む　あの戦場は凪ぎさうもない

ＤＯＴ

雀來豆

マン・レイの毒匂いたつチェス盤にポルカドットのような足跡
二進法に取り憑かれたか昨日から歩くリズムがどうもおかしい
きみが美しく逆立てているその眉は点描法で描かれていました
公園の百日紅咲く樹の下に蝉の死骸が裏向いている
水無月ぼくら魚のように沈黙しビル・エバンスの水玉を聴く
職質される。水玉スーツ。あと鼻の右の穴。それがやばかったのかも。
食卓のラジオの傍にひとつだけ西瓜の種が発芽している
水玉は異名のひとつ空の、海の、ケージの中で鳴くぶち猫の

永遠に白い

寿司村マイク

得意げに容器を見せられ砂糖には賞味期限はないのを知った
百均のパッキンつきの桃色の蓋がなんだか新鮮だった
透明な樹脂のむこうに袋から移しただろう大げさな量
実際はなかなか自炊もできなくていつも容器にま白く積もる
１ＤＫ減らない砂糖が棚にありこころのひとつは目減りしていた
鈍感の目にはくすんだ壁紙の狭いなりにも楽しい我が家
空白を満たすものなく人ひとりぶんだけ二酸化炭素が減った
出ていった君が教えた期限　まだ砂糖はあるし覚えています

残照

たえなかすず

レモン水酸っぱくて目をつむる午後、晴れ　誠実なプールの帰り
手花火をともして無言　闇深いきみとただ幸福になりたい
つくねんとどの人も立つマーガレットいちりん　夏がまっすぐに逝く
きみが去り観客も去りヒロインは私だったかイオンシネマの
会えないという正直が晩夏には一万回も繰り返される
二十二階流れるティアーズ・イン・ヘヴン誘ってくれたことなかったね
懐かしいシャツのこいびと　一滴の涙を知らず手を振り独り
残照　アールグレイに一日の花、一日の波が浮かんで

夏の終わりに

多香子

だいすきな茄子の煮物を仏壇にお供えしながらひとついただく
夏椿祈りつづけて地に落ちる叶わなくてもこころ満ちれば
職業欄自営業と書くときに自由と書きたい欲求はある
メールひとつ何度開けても来やしない　今夜も私ひとりごろごろ
しろがねの小さな鋏で手入れするセシールカットの細い襟足
おしいとも言わずに海に朽ちてゆく夏の抜け殻　私は弱る
樹の話聞いてみたいと樹の幹に耳を付ければ鳥の囀り
この夏の終わりにきみに水色の手紙を書こう　また逢いましょう

あづさ弓はる

高橋良

眠りより覚めて昨日の雨水を青きをだまきの花に遣りけり
弓道につながれし君とわれにして春の娘に命名あづさ
泣きわめく幼子の声に嬰児は円かなる目を瞠りこはばる
幼子が体調崩しわれが看て嬰児をわが妻が見てをり
嬰児の小さき手指が幼子の顔に触るれば笑ひ声出づ
桜桃の葉が出で来たり嬰児は母乳を飲みてふくらかなりぬ
ひさかたの天のまばゆく新しき三輪車漕ぐ二歳のわが子
庭の隅に赤紫の牡丹ありビデオ通話にて妻子の顔見る

スマホと十日

千原こはぎ

おそらくは陽性ですと告げられて十日の監禁生活開始
「九時　八度四分」「十二時　解熱剤」わたしをメモ帳アプリに写す
厚労省からのメールに日に一度答えるここで生きていますよ
YouTube ぼんやり見れば夏だったみんな元気で何よりだった
手のひらのタイムマシンことTVerで録画もしてない過去を観漁る
「こんなときだからかやけに」を言い訳に楽天カートを肥らせてゆく
唯一の外とつながるための窓タイムラインに見る夏の雲
スマホのない世界ならどれほど長い十日だろうか、また咳が出る

お片付けノオト

月硝子

まだ足りないまだ足りないと作り足し溢れたモノで地軸傾く
持ちものを減らせと舟を降ろされて三途の川から追い返される
麻酔から目覚めるまでの空白があまた浮かんでいる手術室
偽りの全能感が引き寄せたモノで溢れている躁の部屋
これまでの欲を詰め込む本棚が夜ごとみしりと足踏みをする
ひしひしと女系家族の抽斗に繁殖をする絹のがま口
写された人も写した人も逝き写真はアルバムごと反古になる
思い出はモノには宿らないことを知りつつ海の絵葉書を買う

がんばれ！蒲公英の戦士
——最強戦隊ブンボーグ005より——

ともえ夕夏

蒲公英の頑是なきごと保育所で俺のかへりを待つ愛娘
敵からの攻撃を受けたる背（せな）のまだ疼きぬて風呂は拷問
さういへばここ五年ほど甘口のカレーばかりを作りてをりぬ
正義つてなんだらうなと眠りぬる娘にこぼしつつ発泡酒
レッドには言へぬ今度の土曜日に運動会があるつてことを
嗚呼ピンクきみもいづれは子を産むかその頃平和になつてるといい
約束を何度もやぶる駄目な父でごめんな悪のせいで家庭は
けんかしてすぐ仲直り子供には学ぶべきことばかり　ゆふぐれ

鉞の上に手のひらを

中村成志

夢のたび唱える歌を追い求めゆめきれぎれののちのあかつき
一斉に蟬が鳴き止み道のうえ心臓の手触りだけがした
抜け殻の裂け目にそそけ立つ糸の緒を思わせる白さのゆらぎ
焼き茄子の皮をゆるゆる箸で裂く蟬の合間に鳴くきりぎりす
皿底に溜まるソースと肉汁を拭くには少し硬すぎるパン
せっけんという切迫の響きあり湯舟をふかくまさぐりながら
鉞（まさかり）の刃の上に手のひらを置いて少しは押したりもして
熱と夢はあちらこちらに点されていま、眉間へと戻ったところ

sea of glass

成瀬悠

水面の向こう側には行けなくて造花の蜜は青くて蒼くて
機械仕掛けの人魚が通り過ぎてゆく生身の僕は目を逸らすだけ
きまぐれのバブルリングに巻き込まれ幾千の生を繰り返して
海霧に溶け込んでいる歌声は皮膚から染みて楽園をみる
涙を流し続けていけば海となる　そう言ってまた涙を流す
夜の海を泳ぎ始めゆらゆらと次第に肢体が融解して
完全な球体となり海溝へ落ちて落ちゆく光を避けて
貝殻を耳に当てたら聞こえ出す昔々の海泡の声

消される前に

奈瑠太

すみませんお借りしてます恋心きちんとお返し致しますので
搾取しているようでいて砂の城しずかの海もいつかは埋まる
深窓の令嬢なんて匿って　明るい窓の空に焦がれた
この恋はわたしの勘定科目では借入金に近いしあわせ
返却の期限を過ぎたしあわせを科戸の風に浚わせてゆく
向かい風のなか手放すとこの胸に戻ったような錯覚をする
上っ面の利子だけじゃなく根っこから取っ払わないと空になれない
さようならなみだを溜めすぎていたからあとは天日干しするつもり

記念パピコ

西淳子

「初パピコ…ども…」と言いたい！もし前世の記憶を持って生まれ変わったら
チューペットを偽パピコって呼んでいた。おとぼけくんもそう呼んでいた
「俺、ちょっとパピコ休憩」「じゃあ僕も」上司と入る喫パピコ室
「もし俺が秀吉だったら信長のパピコも懐で温めてたよ」
祈念パピコ　そういえば兄さんはパピコのへたを好んで食べた
野良猫と路ちゅーがしたい夜ですね歩きパピコで我慢している
チョコモナカジャンボも二人で食えるだろパピコばっかり短歌にするな
ケルベロスにパピコをあげる。余った一本はもちろんわたしがたべる

応答せよ夏のスマートフォン

西村曜

編集をできないままにアップする写真のケーキの桃じくじくと
言いたいことビスケットほどあふれてもコメントボタンが反応しない
触れられる溽暑とおもうまで熱くスマートフォンが反応しない
猛暑ゆえ狂った者もあると聞く　狂う機会も／機械もあろう
手のひらの機械を頬にあててみる　機械の熱に、生きているのね？
流行り病のひとの片頬おもわしめしっかとぬくい夏の iPhone
知恵の実もとうぜん傷み短夜の AppleCare の値上げの知らせ
応答せよスマートフォンよ残された夏も電池もわずかであれど

かばんの中のみずいろの猫

ネコノカナエ

いもうとの机の横の本たての隅のぐちゃぐちゃのなかのみずいろ
みずいろの小さく光るとんがりのガラスの猫のおみみのふたつ
いもうとの部屋は西向き（もうすぐだ）猫のおみみを夕陽があらう
日が沈むまえにおみみを連れ出しておもてでわたぼこりも洗おうか
本立ての隅のぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃに手を入れおみみ救出作戦
ポケットに入りきらないみずいろのねこを帆布のかばんにいれて
みずいろの猫の重みに急かされて階段降りるどんどん降りる
かばんからみずいろの猫をとりだして洗う夕べの水はつめたい

琉球グラスとレモンソーダ

薄荷。

冷蔵庫いちばん手前のふかみどり無果汁レモンソーダのボトル
瓶の首つまんだ指からしみじみと夏の温度が奪われていく
灰色に曇った空をよく冷えたレモンソーダのボトルに沈める
銀色のねこの形の栓抜きはこのときのためにとっておいてる
大切に食器棚の奥しまわれた気泡眩しい琉球グラス
ゆっくりと栓を開ければ王冠が少し曲がって夜は楽しい
夢ごこち夜のグラスに注がれるレモンソーダの分だけ明るい
赤色の琉球グラスに真夜中のレモンソーダはパチパチ歌う

サラリーマンと夜

廣珍堂

同僚に援護射撃をした夜のノンアルコールビールの軽さ
課長へと爆弾ひとつ放り投げ晩飯はチャーハン辛口頼む
先輩がジョギングをする終業後我の疲れは液体のごと
見切り品ひとつふたつとカゴに取るひとり暮らしの街のスーパー
牛肉をしばらく買っていないまま値札も見ずに下宿へ帰る
石鹸が規則正しく鳴る音と片道二分の銭湯へ行く
子供らの花火の声がひびきたる町屋の壁にひかり映りぬ
近所からバッハの練習曲を弾くピアノの音が消えて月出づ

だいじょばない

福山桃歌

ぼやけてもかわいいきみが笑ってる解像度低いけどだいじょうぶ
泣いてたら物理法則無視しつつ抱きしめに行くからだいじょうぶ
ささやいた愛が届いてなかったら何度でも言うからだいじょうぶ
もう二度とめぐりあえない運命もぶち壊してくからだいじょうぶ
忘れられないままでいて永遠を知らしめてくれたらだいじょうぶ
地下鉄がけっして浴びない太陽のひかりも怖くないだいじょうぶ
熱をもつきみの心臓　ぼくだけが触れられるのはなんでだろうね
星になるみたいに言うな本当はなんにもぜんぜん大丈夫じゃない

わたしバニラにする

茉枝くまこ

香水は苦手と笑う　君だけの初夏の匂いを不思議に思う
凝ったヘアアレンジをして送ったら「可愛い」じゃなく「気づいてたよ」と
（聞いたことないやりとりでこんなにも満たされるならいいか）好きです
手をつなぎゆっくり拾うしあわせの大きなたまご　カステラ作る？
夏にしか感じられない涼しさを揺らして遊ぶ　きみがたのしい
ぼくときみ溶けて消えてく　その星のなかでいちばん静かな都会
さりげなく待っててくれたそれだけで冬を越すには十分だった
歩くのが早い貴方に後ろから明かりを灯すひとでありたい

矢雨

まさけ

県道を走る車のワイパーがあばよあばよとネオンに揺れる
バス待ちが滝行めいて誰しもが今日の諸罪の反芻をする
堕ちていくイカロスが背負う羽根でした煽られ折れたビニール傘は
けばけばしいラメのアメ車が繰り出したソニックブームのような水はね
ダメージは無いと決めてる人間は7割水で出来ているから
バス中へレインコートで乗る人の重装歩兵のような出で立ち
冷房が効きすぎていて心臓を貫く矢雨の傷が癒えない
雨風に萎えた朝顔泣きたくて濡れてる窓の外ばかり見る

いつもひらく

御糸さち

アラームを止めることから一日は始まっていておはようスマホ
「おはよう」とつぶやいたってひとりごとだったな十年くらい前まで
カレンダーアプリを覗く瞬間にアレクサが鳴く「リマインダーです」
スマートフォンだからスマホは変でしょう？みたいな顔でなんなんすかね
何かすることがあるとき何もすることがないときスマホをひらく
「疲れた」とつぶやけばすぐ「お疲れ」とリプライが来て　最高じゃんか
冥界は生きてる人のためにあり今日もあかるい自動ツイート
十年後、何をひらいているのだろう人を刺せないひとさしゆびで

ミラクル・ロマンス

～セーラームーン最終回に寄せて～

深影コトハ

何度でもこの地に生まれて出会うこと亡びる夜に約束をした
遠雷のフラッシュバック　忘れたくない人がいて耳たぶに薔薇
愛用のコンピュータに微笑んで理性に凪いだチェックメイトを
まっすぐに金色の愛で宙を射しあなたは叱りつつ死んでゆく
戦場にヒールを鳴らす人だから躊躇いすらも燃やし尽くして
辛すぎたカレーライスにべそべそと泣くのがきっと幸せだった
純白のドレスで戦う横顔にすべての少女の主題歌が降る
守られるじゃなくて守る　新しい時代に生まれてゆく光たち

春がみた罪

水せ

薄紅の春が見たのは黒鍵を選んでたたく一夜の過ち
ひびく音すこし疲れていただけで眠っていればよかったはずの
繰り返す日々を探して振り返るあともう一歩踏み出せたなら
ふるい記憶のなかで咲く少女たち熱は加速し青く儚く
彼は誰の時は優しく夢を見せ目覚めの光いたみをいだく
揺れている名前もないの胸に咲く思いはひとは風になびいた
始まらずだから終わりもないのです桜ひとひらさよならもない
時の花燃え盛るほど過ぎてゆく時のかなしさはやすぎるつみ

捨てる、捨てられる

虫武一俊

青空を瞼で噛めば立ちくらみ九月のなかにしばしへたりこむ
捨てられた空き缶が街に競い合うどれだけうすく潰れているか
はんぺんを捨てる　ふわふわしたものから順に希望がなくなった世を
完璧を追求すればがだしゃんと最初にこけてもうそれっきり
みんな誰かの模倣だからな海に来て海にキレたりすればいいんだ
スプーンに気づけば乗っている顔が歪みをもって世界に映る
ねばりつく日の街角にせんとくん一〇〇〇〇〇人が葬列を行く
よく熟れた街の光の美味しさに潤ってまた生かされていく

少年時代

睦月　雪花

ぬけみちの響きが好きでちょっとした小道は全部ぬけみちだった
少年団みたいにキャラは立たなくて眼鏡とフツーとフツーとのっぽ
いつだって勇者になれたちょうどいいサイズの棒を振り回すとき
（よそはよそ、うちはうちって言われてもアイツん家で出たケーキが食べたい）
点数の低いテストを飛行機にすればいつでも空は味方だ
聖剣を振る　犬が吠える　聖剣を振る　「ただいま」で棒へともどる
カッコイイ石せんしゅけん　もう誰も一位のかたちを覚えていない
茜さす裏庭にかつて僕たちがつくった秘密基地のまぼろし

忘れ咲き

六厭めれう

おかしいね軽く見ていたあなたから心に響く名言を聞く
鏡越しクローゼットに掛けられた抜け殻である背広一着
夏の日のおっかなびっくり蜂の巣の穴を覗けど廃都廃帝
標本は少し残酷うつくしい翅のまんまで生きながらえて
この町におそらく来ない遠雷のように聞こえる流行がある
明日言うと決めたることを詩のように幾度も反芻している時間
この部屋に荷物を取りに来る人を消化試合のごとく待ちたり
物売りが来たのがわかる遠くから母音を長く引く声がして

赤蜻蛉と赤い蝶

村田一広

赤蜻蛉とまたすれ違ふ人の目の高さに合はせ飛んでるやうな
並んで歩いてた猫。僕が足とめたら猫もとまつてくれる
君が見つめた空間の一点に蝶が生まれて静止してゐる
ひとしきり笑つたあとでさよならと。声だけがまだ残る空間
レモンパイ９９％食べても１％必ずこぼす
スプーンで削れるほどにピーナッツ煮込んであつた台湾の粥
おみやげのクッキー缶の華やぎにテーマパークが凝縮してる
変形のビニール傘は変形の雨粒伝ひ放置されてる

ぜんぶ夏のせいです

森内詩紋

コンビニのアイスコーヒー美味しくて恋におちたと勘違いした
指先で西瓜の種を全部取る　丁寧に取る　そういう人か
ため息をついて収穫するゴーヤ　熟しすぎてもおもしろくない
呑めぬのにつれていかれる　グチを聞く　完全アウェイのビアガーデンで
ずんだ餅嫌いな人に無理をして合わせられるほどもう若くない
ゆるすとかゆるさないとか決めないで　ただ甘いだけのクリームソーダ
番号を消してしまおう　わたあめを夜店で買おう　もう遠花火
青林檎噛めばパキリと潔く爽やかに秋の入り口に立つ

フローチャート

杜野詩季

誤差のない優しい宇宙どこまでも薄布めいた朝顔が咲く
渋滞はちょっとだけ好き問う度に並木が降らすインスピレーション
地元の子他県からの子ユニフォームにおんなじ泥が誇らしく付く
空耳のサイレンだった国道のけやき並木は穏やかなまま
赤紫蘇（あかしそ）は全てジュースに変えられて喉元落ちる夏の底へと
透明な巨人がそこに　今足を稲に置いたよ風をまとって
エアコンオン麦茶素麺かき氷エアコンシャワーエアコンタイマー
（夏の暮れ花火は時間を奪いとる）息呑み込んで線香花火

顔をうずめる

ゆや　ゆき

まぶたから差し込む朝日夏色の赤だと思う　フクシアの咲く
晴天に雨音聞こえ耳澄ますグラスに満ちるサイダーの泡
もう夏も終わりと言うのカーテンを膨らます風傾く日差し
落ち込んでいるが理由は分からないいつも明るい職場のトイレ
紫陽花に顔をうずめる花蜂をいつまでも見る落ちそうになる
どうにでもなると言われて今日もまた流されたままたどり着けない
徒長したレタスのように絡まってきっと死なせてしまうのだろう
吹く風が夏の終わりを感じさせ見上げた空にうろこ雲浮く

数える

ゆりこ

誰だっけ?オイラー、ガウス、シュレディンガー　ピラゴラスイッチ目で追いながら
あの人の幸せを問うコイントスして検定をする走馬灯
この式の解はなかった楽しみはカレーに入れた人参の星
積分で心の広さを求めたら手のひらくらいの鶏肉だった
ｉはどこ?数直線を避けながら跳ぶ白猫の夢を見る午後
楕円なら必ず会える焦点で待っていますと鳴く黒い猫
歌を詠み指折る夕べ数学も虚数があるから美しくなる
背理法　でも、だけど、今は幸せに暮らしているならそれだけでいい

ひと駅分を歩いてみれば

龍翔

ＫＩＮＧコーヒーの自販機　王様は民を横目で眺めてをりぬ
ティッシュでも配るごとくに「家、要りませんか」と問うてくる営業は
わたくしはまだ駐められない宗教者専用といふ駐車場には
シャッターは自動で閉まる　高齢の女性をひとり生み出したあと
バーババパパの錆びた缶へと三本の空気入れ差しゐる自転車屋
クリニックの前過ぐるとき見かけたり防護ガウンを着た看護師を
ラウールとしよつぴーと目が合つたのでモスバーガーの前で佇む
バーミヤンの看板見ればあらはれる柴田葵とどんぐりたけし

鈴虫の乞

れいあむ

切抜きの裏地に透けるグラデーションはたはた揺れて風鈴の鳴る
鈴虫の恋の叫びが届かないスマホ越しの祈りの虚しさ
「シアワセを」祈るその手が掴む頸サヨナラなんてしないくせして
頸さする程よく乾いた指先が優しく暴いた矮小な星
双子星さそりの焔が絶えぬ夜寝汗かく背眺めて泣いて
巻き肩の猫背が揺れる朝だからおさんぽしたいコンビニでいい
コンビニのおまけをくれた君だから大事にくるんで持ち帰ります
暑かった夏の終わりに恋をしておまけのように大切にした

テーマ詠「涼」

冷房をつけっぱなしの部屋にいて昔と違う夏の只中　◆麻倉ゆえ
透けている金魚柄した水団扇「い・ろ・は・す」滴らしきみは扇いだ　◆雨虎俊寛
ないはずの桃とナイフがひんやりと夏の寝覚めの闇に匂ひぬ　◆有村桔梗
音楽が閉じ込めているたましいに涼雨はかみなりを添加する　◆歩歩
セミが鳴くときは幽霊でなさそう幽霊でたらちょうど涼しい　◆池田竜男
納涼の怪談お化け屋敷かな氷の城や花火を眺める　◆石川順一
涼風を孕むヨットが消えていく江戸風鈴の水平線へ　◆宇祖田都子
涼しさをもとめてグラスを抱きしめるクリームソーダコーヒーフロート　◆hs
海水に涼まんとてもバーデンのごときぞ　火傷を湯治すべきか　◆大坪命樹
レモネードを作るのがうまい友達の隣はいつもすこし涼しい　◆音無早矢
スズムシが涼虫として夜に引く極細蛍光ペンの白い声　◆音平まど
荒涼な地はひび割れて何者も囚われず行く風は愉快だ　◆歌島孟
夕焼けを三条大橋で見てた買い物に来たついでの記憶　◆涸れ井戸
一人だけきっと特別なのだろう涼しい顔をしている彼女　◆河岸景都
白木屋で涼しげに泣く友がいてヤゲン軟骨大人しく噛む　◆北谷雪
エアコンの風浴室に遠き蝉の声と協演するが涼しさ　◆砧
初恋は実らないって知っていたかき氷からしずかな頭痛　◆君村類

飄々としてると言われがちだった涼やかな風は向こう岸で凪ぐ
フルートの涼しい音が鳴る前に友が吸い込む息の鋭さ
涼やかな頬なでる風ゆきすぎて放つ光がわたしを射抜く
マイナーな清涼飲料水ばかり残った自販機だけのかがやき
目をつむりていても射しこむすずやかな花咲く乙女たちの断章
蝉の声街から消えて涼風に少し寂しさ覚えた日暮れ
風鈴を食べてるみたい銀色のスプーンが桃のパフェ掬うたび
さようなら　回転木馬で泣いた日をスシローで思い出すエモい秋
公園に子と遊びてゐて寺の鐘が六つ時知らする旧宿場町
夜、夏と秋のはざまにきみのいない窓からほそくとどく鈴の音
年下のきみは涼風わたくしの名をこはごはと呼び捨てるとき
指先が冷たい　なんて。じゃあ言うけど（あなたの喉もこんな涼しい）
ペンギンの遺言みたい。涼やかにグラスの中の氷は鳴って
明け方の街はぼくらに涼しくて魚も鬱になるって聞いた
軒先の南部鉄器の風鈴のちりり微笑む秋風涼し
スーパーの氷菓はすでに売り切れで冷凍ケースの底の金属
絶望に殺されるたびちはやふる涼宮ハルヒの憂鬱を知る

◆咲兵衛
◆佐藤氷魚
◆汐射ハルカ
◆西鎮
◆雀來豆
◆白石夜花
◆神保一二三
◆たえなかすず
◆高橋良
◆千原こはぎ
◆ともえ夕夏
◆中村成志
◆西淳子
◆西村曜
◆薄荷。
◆廣珍堂
◆福山桃歌

高くなる空に捧げよソーダ水陽を追う氷カラとひと鳴き
秋はらむ朝風まとうひとときは夏を忘れる朝顔とわれ
濃い影の中に逃げたら百日紅　雪かと見まごう白を散らせて
フリスクを一粒食べる気軽さで彼がしてきた涼しげなキス
「カブ」「トム」と名を付けられて虫かごの二匹にやがてシは訪れる
たっちゃんと納涼会で手をつなぎゾンビが出て手をはなし、そのまま
涼風を1人分だけ味わってあなたのいない縁側の夏
涼やかな横顔をみる黒板の文字を写した記憶は遠く
待つてゐた涼風かくも寂しげに顔をくすぐる晩夏の夕べ
明日から七分袖着て行こうかな　もう鈴虫も鳴いているから
涼しくてただ涼しくてそれだけで心が洗われそうになるんだ
涼しさを渡せる子にと望まれたあの子が彼を追い越す三十路
涼しげと言い難い色ばかり着て太陽にでもなった気でいる
職場へと迷い込んで来た素手でつかむバッタの涼しげな色
白百合は涼しげに咲く　教室に居場所がないと少女は笑ふ
扇風機風を阻んでご満悦瓜ふたつの手ゆるく繋いで

◆細川エリカ
◆螢子
◆真岡まな
◆まさけ
◆御糸さち
◆深影コトハ
◆衣未
◆水せ
◆村田一広
◆森内詩紋
◆杜崎ひらく
◆杜野詩季
◆矢野目知桂
◆ゆりこ
◆龍翔
◆れいあむ

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から気になった一首をとりあげて200文字くらいで語る一首評のコーナーです

ホームとの隙間に落ちそうなものは今日
渡したい手紙しかない　阿部蓮南

青春詠。率直なのか婉曲なのか。きっと年長さんにはわからない。わかるのはこれがとても魅力的な歌だということだけである。・・・電車を待っていると駅の構内放送が聞こえてくる。いつもは聞き流しているのだが、今日は耳に残った。絶対に線路に落としてはいけないものを持っているから。いやもしかしていますぐ落としてしまった方がいいものかもしれない。そんなことを思っていると、意外とすぐに電車が来た。坐れるといいな。

一首評　雀來豆

それぞれの空で僕らはつながって雨を降
らせて暑いねと言う　泳二

「青空」。別れたばかりの恋人を思う一連であろう、その最後の一首。別れ別れになった（元）恋人たちが「それぞれの空のもと思いを馳せる」景には、もしかしたら既視感が漂うのかもしれない。だが、そんな上句に続く下句には、たおやかさとエッジが同居したような不思議な読み味がある。元恋人への思いを断ち切ろうとする気持ちと、断ち切ろうにも断ち切れない辛さとが絶妙な温度と湿度で再現されたような。

一首評　西鎮

確率を求めなくても大丈夫もう二人とも
生きてゆくから　河岸景都

「数学は嫌いだった」の締めの歌。連作は、空洞だけを味方として生きていたのに、生活の中に反比例や鋭角などの数学を見出して、「君」に人生の方程式を訊いたりする。それでも、今ではもはや確率を求めなくていい。それは、「君」と連れ添い人生をヴィヴィッドに生きるからであり、数学という未来予想が必要なくなったからとも言えるかもしれない。生きること自体が現実である価値には、もはや数学という計らいはいらないのだ。

一首評　大坪命樹

ハッカ飴きりりと噛んだ吐く息で入道雲
を生みだしている　薄荷。

「吐く息」という小さなもので「入道雲」という壮大なものを生みだしているのが面白いです。まるで主体の身体がわたあめ製造機になったみたい！ハッカ飴の見た目や清涼感と入道雲の白さや空の青さがマッチしているのも良いですね。声に出して読んだときに、上の句が「ハッカ飴」、「きりり」、「噛んだ」、「吐く息」とK音が続いていて、ハッカ飴を噛んだときの鋭い音やスースーした感じが表れているなあと思いました。

一首評　西淳子

リムジンの窓をバットで割っていく　あ
なたに風を感じてほしくて　深山睦美

この歌を最初に読んだ時、シチュエーションがさっぱりわからないけれど惹かれるものがあった。しばらくして、連作のモチーフはおそらく「TOP4」というゲーム実況者たちなので、ゲーム内でリムジンの窓を割っているのだろうと理解した。上の句の暴力的な行為と下の句の優しくやわらかな動機とのギャップ。ゲーム上でも、リアルの世界でも、表面に現れる行動からは決して読み取り切れない心情が存在している。

一首評　佐藤氷魚

「まだ島に人が残ってるんです」と誰も
言わずに船は出ていく　深山睦美

最近、50年前のドラマ「日本沈没」を見たせいか、妙な臨場感を感じた。あるいは映画「タイタニック」、喜界島の俊寛。もう出航しなければ乗船者も共倒れになる。そう分かっている状況で、「待って！」と叫べる人がどれくらいいるだろう。少なくとも僕はその一人にはなれそうにない。
鉤括弧がほぼ上句、状況描写が下句というオーソドックスな造りが、緊迫した中にもよそよそしい静けさを醸し出している。

一首評　中村成志

茹でたての海老にアスパラ、とうきびも
死にたての色はご馳走の色　咲兵衛

食材の赤、緑、黄色が鮮やかに広がったと思えば、皿に乗った美味しそうなそのご馳走を「死にたての色」とばっさり断言する下句。読み手は少々たじろいでしまう。思わぬ視点を投げかけられて戸惑うが、しかし妙に納得する。食材は身を投げ出し私たちを生かすのだ。そしてそこから思い起こす飽食、飢え、食品ロスなど・・・日頃意識しているようで、食卓の前では忘れがちになる我らに警鐘を鳴らす一首である。

一首評　杜野詩季

一滴で澄んだ紅茶を濁らせる罪なきミル
クの罪なき白さ　雛河麦

テーマ詠「色」。白を詠み込んでいるが、一首からは紅茶の色の変化が鮮やかにイメージできる。牛乳やコーヒーフレッシュの一滴が紅茶に溶け出し、マーブルをなしてミルクティー色になる。澄んだ紅茶の色を凌辱するように濁らせるが、ミルクに罪はない。元のミルクの白は、まさに「真っ白」で罪はない。「罪なき」という文語表現の反復が一首を凡庸にさせなかった。紅茶もいろいろな色があるが、好きな紅茶でこの一首を味わいたい。

一首評　高橋良

短歌リレーコラム

望遠鏡 ⑩

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　なぜ短歌なのですか？
晶子と須賀子とわたし

書き手　ともえ夕夏

獅子の群飢へし爪とぎ牙ならしある前に見ぬ廿五の犠牲（にえ）　菅野すが『死出の道艸』

何で短歌なんですか？　とよく訊かれるのである。

と、いうのも。元々若い頃は芝居をかじっていて（というわりには、かなりのお金と時間を費やしたので、かじるどころの騒ぎじゃなかった）そればかりに注力していたことを周囲の人々はよく知っていたし、芝居以外ではとにかく長文を書きまくることがライフワークになっていたところがあったので、訊いてくる人々は往々にして「あんたと短歌の接点がそもそも……」という感じなのである。わかる。私自身も何で短歌なのって常々思っているもの。

自身で恋を歌うのはあまり得意ではないのだけど、そんな私が自分の中でいよいよ短歌を発芽させねばならなくなったその決定的なきっかけは、奇しくも熱烈な恋の歌であったことを思い出したので、そのことについて書こうと思う。

1996年。私と当時の仲間はそれぞれ、与謝野鉄幹、与謝野晶子、北原白秋、石川啄木、佐藤春夫、平野万里、平塚明子（後のらいてう）、大杉栄、菅野須賀子（実在の人物としては菅野すが　冒頭の「死出の道艸」の中に「須賀子」との自署が認められている）として舞台に立つこととなった。演劇人マキノノゾミ氏作の「MOTHER君わらひたまふことなかれ」を大学の卒業制作として取り組むことに決まったのは、その年の二月。恐ろしく寒く雪深い、軽井沢の大学研修所での合宿に於いてであった。私はこの作品を一読し、芯となる与謝野晶子に魅了されたのは勿論だったが、それ以上に菅野須賀子というなかなにハイな女性に惚れ込み、どうしてもこの役をやりたい！と強く思った。キャスティング選考はここからもう少し後のことなのだが、演出家として起つ同胞にそりゃもうすごい勢いで自分を売り込みにいった。此処まで生きてしまうと、振り返ればそう大して長くもない役者人生だったが、後にも先にもここまで一つの役を獲るのに尽力したことはなかったかもしれない。

そして、無事に菅野須賀子を射止めた私は、この年の秋、怒涛の稽古生活に突入していったのだった。

先述した主要人物たちの名を見て、多くを語らずとも勘のいい人たちには時代や物語の大筋はおわかりいただけることと思う。ドラマは与謝野夫婦を中心に、愛や恋や文学や人生、史実に残るエピソードなどを下敷きに描かれていた。

稽古の傍ら、戯曲以外に当時の資料を片っ端から読んだ。先の人物らの作品をはじめ、大逆事件のこと、幸徳秋水のこと、『青鞜』のこと、舞台となった町の地理や歴史、当時の出版について、etc.etc…　だが、どうしてもひとつだけぼんやりとしたまま輪郭の定まらないことがあった。

与謝野晶子の大ファンだと公言し、それが昂じて家にまで押しかける須賀子。彼女が晶子の歌のどういう部分に心酔し、傾倒し、信仰に近いあこがれを持ったのか。これは上澄みをなぞっているだけではだめだ。晶子の歌をもっともっと読まなければ。調べると、実際の菅野すがは、獄中の日記にいくつも短歌を記している。ちなみに本文冒頭の歌は、戯曲の中にこそ出てはこないのだが、死刑が決まった頃の日記に記されていたものとされる。使われている言葉の端々に、触れれば切り付けられそうな鋭い思想や、革命者としての強い信念が滲んでいるように感じる。こんな歌を詠む女性が文字通り命を懸ける恋をしていたという。彼女は同志・幸徳秋水の内縁の妻であった。それは大逆事件を繙くと必ず語られていた。

尽きぬ今我が細指に手繰り来し運命の糸の長き短き　菅野すが『同』

これも冒頭の歌と同日の日記にあったとされる。革命者としての運命を詠んでいるのかもしれないが、一方で幸徳と共に処刑されることに対する頗る強い充足感みたいなものも見て取れる。彼女にとって運命とは、自分の手で起こす革命もあったろうが、愛した男と共に果てることでもあったのかもしれない。……少なくとも私が戯曲の中で見た須賀子は、太く短くたくましくぐわっと幸徳を愛し抜き、そうして死んでいった。

そんな須賀子の科白の中に、晶子の有名な短歌が出てきた。

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君　与謝野晶子『みだれ髪』

後年我々が学ぶことになる国語の教科書にも出てくる、有名な一首。私もこの戯曲にたどりつく以前に学校の授業か何かで出会っている。「その子二十……」などと一緒に。そして須賀子は「MOTHER」の中で、これを読みながら泣くのだ。「あなたを見つけることができた自分が誇らしい」などと死して尚、幽霊として晶子の前に現れて。

泣くのか……と思った。この歌に、須賀子が欲しくて欲しくてたまらなかった恋の形がつまっているのだ。稽古場でつけたノートを読み返していると、当時の私がここでかなり苦悩し、逡巡した痕が見て取れる。死ぬほどの恋ってなんなんだよ、そんな男にこちらとらまだ出会ってもいないのに。まだ若かった私も、晶子を演じた同胞も、かなりの苦労を強いられた。のっぺりとした恋しか知らない平成の大学生が、明治を全力で駆け抜けた晶子や須賀子らの紫電一閃ともいえる運命的な恋愛を演じる。まぁ、ざっくり言って無理ゲーなのである。

と、このような経緯があり「これは自分でも詠んでみないと一生解り得ないかもしれないな」と思い、私も覚束ないながらに見よう見まねで短歌を詠み始めた。当然のことながら、うまくいかない。そりゃそうだ。これまで自分の躰を楽器にして科白として表現するか、もしくは限界量にまで膨らませた長文でしか表現をしてこなかったのだ。言いたいことが収まらない。どうすればいいのよ。どうしてこの人たちは短歌なのよ。たった三十一音に詰め込むとか曲芸じゃないの。どこにもぶつけることのできない不満や不安とともに、私の短歌はこのようにしてスタートしたのだった。

あれから四半世紀。結婚と同時に芝居はやめてしまった。子供を産んだら、長時間執筆をするというスタイルを貫く体力も時間も無くなってしまった。短歌ならその隙間にも差し込めるかと思っていたけれど、それすらかなわないことが長く続いた。

「（略）……詩や歌をつくることは楽しい仕事でなくちゃいけないわ。そうでなくて、どうして人の心に届くかしら？　歌を詠むことも、子供の世話を焼くことも、自分の夫が仕事に打ち込んでいる姿を見ることも、その夫が苦しんでいるときに、たとえわずかでも励ましや慰めをおくってあげられることも、そしてついには喜びを分かちあえることも、私にとってはすべて無上の楽しみなの。（略）」

マキノノゾミ「MOTHER　君わらひたまふことなかれ」晶子のせりふより抜粋

今、生活の中に短歌があるようになってこの科白を読み返すと、あの頃、漠然と同胞の声で聞いていた言葉のひとつひとつが嘘のようにすんなりと浸透してくる。実際の晶子がどのように思っていたかはもはや確かめる術もないが、母であり、妻であり、歌人であったこの女性にあこがれた須賀子の気持ちが、やっと背伸びすることなく理解できる気がしている。そして今尚、与謝野晶子と菅野須賀子は私のあこがれなのである。

リレーエッセイ 10

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　越
書き手　木村槿

文化祭前夜みたいな残業をいくつも越えて見た空がある

木村槿

広告業界に入って早くも4年が経った。まったくの他業界から広告業界に飛び込み、コピーライターとして働いている。この業界といえばブラックな印象が強いだろう。たしかにホワイトではないが、早く帰れるときは帰れるし、土日はほとんど休めているのでわたしが今いる環境は恵まれている方かもしれない。でも、住宅、セキュリティ、教育などさまざまな業界を経験してきたなかで、退勤時間が0時を越えたのはこの業界が初めてだった。

一度目は単純に仕事の量が多すぎて終わらなかったときだ。たしか途中で少し寝てしまい、2時頃にタクシーを呼んで帰宅した。今思うとめちゃくちゃである。二度目はパンフレットの読み合わせの日だった。読み合わせとは、原稿を声に出して読む人・目で読む人に分かれて原稿が正しいのかどうかを確認する校正方法のこと。これまでに来た修正指示や表記ルールと照らし合わせながら「ここの〝つくる〟は〝造る〟でお願いします」「ここに半角スペース入れます」といった感じで細かく確認していくのだ。朝から始まった読み合わせは昼を越え、眠気を越え、定時を越え、いつの間にかとっぷりと日は暮れていた。心配して声をかけにきてくれる同僚、差し入れをもってきてくれる部長、目から光が失われた読み合わせメンバー。疲れると笑いのツボが浅くなってしまうのか、メンバーの1人が「―（ダッシュ）」のたくさん入った表を「ボーボーボーボーボー（棒棒棒棒棒）」と読み始めたときは吹き出してしまった。みんなの体力が限界に近づくなか0時を越え、終わったのは1時過ぎ。タクシーを呼んで帰路につき、最寄りの駅で降ろしてもらう。この深夜の空気の感じは夜行バスのSA休憩に少し似ている、と思った。家に着いてすぐに寝て、朝には普通に出社した。

なかなかしんどい思い出なのだが、この日のことは「文化祭前夜」みたいな感覚で覚えている。あんなこともあったよねと笑えるくらい、いろんなことを乗り越えてきたからかもしれない。思えば、仕事での苦しい記憶のほとんどが「文化祭前夜」じみている。数千字の原稿を1日で終わらせた日、時間が無さすぎて移動時間にスマホで原稿を作った日、残業してコピーをひねり出した日。〝あのときほどではないから大丈夫〟と、「文化祭前夜」は何度もわたしを救う。苦しいことはできれば経験したくないけれど、こんなふうに自分を奮い立たせる光のようなものなら悪くないかもしれないと思える。これからの人生で起こるであろう「文化祭前夜」も楽しむことのできる自分になれるよう、全力で日々をやっていく。

次号予告 うたそら 第11号

連作欄 8首の連作 自由詠
テーマ詠欄 「果物」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」

短歌募集

投稿先等、
詳しくはうたそらの
ご案内ページを
ご覧ください
http://kohagiuta.com/utasora/

第11号 〆切 '22 10/31（月）24時
●8首の連作 自由詠　●テーマ詠「果物」1首

第12号 〆切 '22 12/31（土）24時
●8首の連作 自由詠　●テーマ詠「温」1首

編集後記

厳しい暑さも少しずつやわらぎ、夜になると虫の声が聴こえる季節となりました。クーラーを効かせている部屋より窓の外のほうが涼しい夜もあったりして、季節の移り変わりの早さにおののいています。皆さまいかがお過ごしでしょうか。

このたびは、短歌誌「うたそら」第10号へのご寄稿をいただきまして、ありがとうございます。ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第10号の参加歌人さまは70名、連作欄には58名、テーマ詠には50名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「涼」。うだるような暑さを一瞬忘れさせてくれる、涼やかな短歌が集まりました。

一首評「そらよみ」は第９回です。歌を投稿するだけではなく、読んで感想を伝える／もらうことで、得られる気づきや喜びもあるのではと思います。また、「短歌は作らないけど読むのが好き」という方の、「そらよみ」コーナーだけのご参加も大歓迎です。

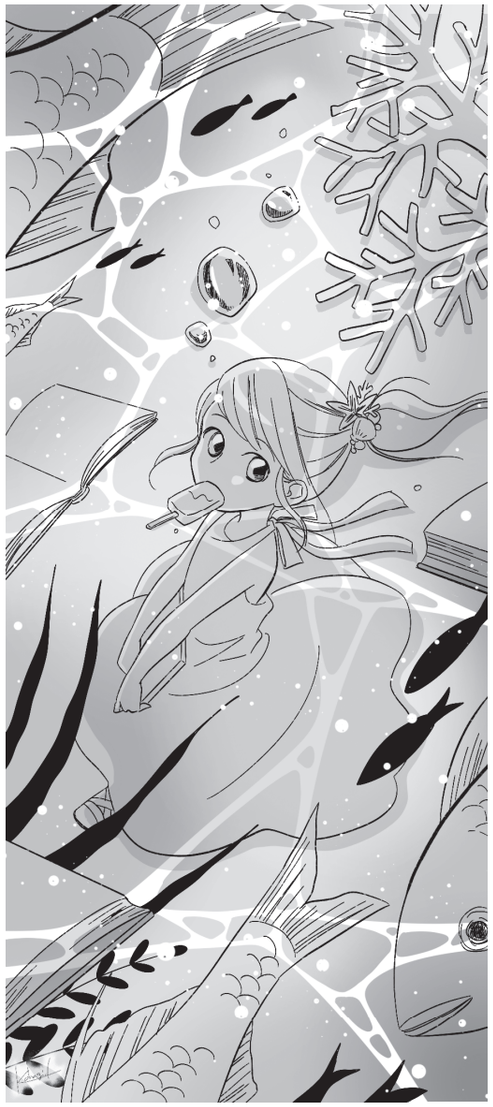
短歌なリレーコラム「望遠鏡」はともえ夕夏さん、リレーエッセイ「いちごいちえ」は木村槿さんが書いてくださいました。ありがとうございます！

今号も皆さまのおかげで読み応えのある「うたそら」をお届けすることができました。終わりゆく夏のお供に、どうぞごゆっくりお楽しみください。

「うたそら」では Twitterでの呟きもお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号は10月末〆切の11月初旬発行、テーマ詠のお題は「果物」です。食べ物のおいしい季節ですね。たくさんのすてきな作品をお待ちしております！

編集鳥　千原こはぎ



うたそら　第10号

発行：2022.09.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/